

カトリック六甲教会 教会報

2011

11

No.479

たった一つ必要なもの

片柳 弘史 助任司祭

10月中旬、イエズス会の仕事で仙台から石巻、女川、牡鹿半島を周ってきました。そのときの体験の中から一つ、牡鹿半島先端部にある十八成(くぐなり)地区で出会った信者さんのことをご紹介します。

十八成地区はかつて白砂青松の浜でしたが、津波によって砂浜はすっかり流され、松も倒されて今は見る影もありません。浜辺にあった100軒ほどの家も流されました。私たちが訪ねた石巻教会信徒のご婦人、遠藤さんの家はかろうじて波を免れていましたが、隣家は流されていました。遠藤さんの案内で、私たちは十八成と鮎川の集落の被害状況を見て回りました。

石巻や女川の街では、瓦礫やゴミの撤去がかなり進み、復興に向かう確かな動きが感じられましたが、この辺りはまだほとんど手つかずの様子でした。外壁が激しく損傷した建物や、倒れかかった建物がそのまま放置され、あちこちにコンクリートやアスファルト、漁網、ブイなどが散らばっています。7ヶ月以上過ぎたはずなのに、まるで昨日津波が来たかのような惨状です。



遠藤さんは私たちに、津波で家を流され、高台の仮設住宅で独り暮らしをしている友人の田端さんを紹介してくれました。田端さんはプロテスタントの信者さんですが、ご主人の葬儀のとき骨箱に十字架が記されているのに気付いた遠藤さんが声をかけたことから交際が始まったそうです。

田端さんに仮設住宅の中を見せてもらいましたが、とても簡素な作りで、果たして三陸海岸の冬をこれで乗り切れるのか心配になるくらいでした。一向に復興が進まない街をここから眺めながら、きっと辛い日々を送っておられるだろうと思って、わたしは田端さんに「たいへんですね」と声をかけました。すると田端さんは、机の上の聖書を手に取ながらにっこりほほ笑み「いえ、わたしにはこれさえあれば大丈夫なんです」と答えられました。その穏やかなほほ笑みの中に、私はまばゆいほどの信仰の輝きを感じました。



私たちは田端さんのように、全てを失っても聖書に記された神の御言葉さえあれば大丈夫と言えるでしょうか。田端さんのほほ笑みの奥にある謙遜な心、神への信頼と感謝に学びたいと思います。



【イエス・その5】

イエスは、「死者からの復活」により、十全な意味で救い主キリストになった。イエスをキリストとする復活は、キリスト教信仰の原点である。

1. 復活に関するテキストの分類

(1) 復活の使信（ケリュグマ）：

① 復活者の出現に言及するもの；

「最も大切なこととしてわたしがあなた方に伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。」

(I コリ 15:3-5)

② 復活者の出現に触れずに、直接復活を証言するケリュグマも多い；

「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。」(ロマ 1:3-4)

③ カテケーシスの定式から取られたと考えられるもの；

「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。」(ロマ 10:9)

④ 原始教会の賛歌；

「キリストは神の身分でありながら、神と等しいものであることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。……」(フリイピ 2:6-11) これらは福音書の復活物語よりもはるかに古い。原始キリスト教団が公式に信仰を義務づけた内容を伝えている。

(2) 各福音書の巻末に配置された復活物語：

ケリュグマに比べて、ずっと後の時代に形成された。様々な伝承の過程を経て、福音書記者たちの手によって編集され脚色され、物語の形式で伝えられたもの。

① 空の墓の発見（エルサレムを中心として伝承された）

この史実性は確度が高い。だが死体が起きあがって出て行ったことの証言ではない。イエスの復活の意味をすでに知っている者にとっての一つのしるしである。

② 出現物語（ガリラヤ地方で伝承された）

復活者は教会と共に世の終わりまで現存するという神学。だれもイエスの復活場面そのものを体験していない。復活したイエスとの出会いを体験し、この出会いからイエスの復活の出来事を知り、理解したのである。

2. I コリント 15 章 3-5 節の解釈：

弟子たちは、復活したイエスとどのように出会い、イエスの復活をどのようなものと理解したか。

① 「三日目に甦った」神が復活させたと同時に、キリスト自身の出来事である。；

この出来事は、ギリシャ語原文から読むとき、過去の時点のみの出来事ではなく、その出来事は今も続いていることを言っている。

② 「現れた」この物語は神・天使など超自然的な存在が、目に見える姿で現れること。；

復活者が自分を見せたという意味と同時に、神が復活者を見えるようにしたとの意味である。いずれも視覚で確認できるという意味に限らない。超自然的な啓示の経験である。

3. 「出会い」の内容とその二面性：

① 復活者との「出会い」のリストが挙げられていることは、リストに挙げられた人々の実在とともに、

復活者の出現が、この世界内の時空の一点に起こった現実の出来事であることを示している。

- ② 他方、復活者との出会いは、神と特別の恵としての啓示であり、他の神秘体験とは区別される。これは唯一無比の体験で、彼の使徒職を根拠づけるものである。

復活の認識の可能性として、次の6つがある（神学者の理解）。

- ① 歴史学の方法によって、きっちりと証明できるという立場をとる。
② イエスは復活しただろうが、それは決して理性で捉えられないことであって、信じるしかないというパラドックス的な立場にたつ人々である。
③ イエスは実際に復活せず、弟子たちがイエスの関心事を広めたと言う立場をとる。
④ 宗教史学派による当時の神話のパターンに当てはめる立場をとる。
⑤ 単に、弟子たちのインチキであるという立場をとる。
⑥ 歴史的に直接に証明できないが、十分に根拠在る信仰であるという立場をとる。

この立場を取る神学者によると；復活信仰は次の四つの要素を持って成立した。

- ・イエスをいつまでも思い起こしたメモリアである。それは決して忘れることが出来ない根本的な実存的出会いであった。特に彼らの心に、イエスの愛が刻み込まれたのである。
- ・自分たちをその愛に駆り立てる神の霊を体験した。愛のエネルギーが霊によって生じてくるのを感じたのである。
- ・その霊によって、弟子たちはイエスの愛を実際に生きる人へと変えられていき、その霊がまさにイエスの霊であることを悟ったのである。
- ・そこから様々な異常現象を事実として認めることが出来る。それらは“証拠”ではなく“助言・示唆・指針”だと考える。一般に①～③の体験は可能であるから、ある意味でイエスの復活を体験できる。だからこそ我々も復活信仰に生きることが出来る。

4. 「キリストの復活」の中心的意義：

イエスの復活とはイエスが生と死を通して行った奉獻が神に認められ、完成された出来事である。イエスの死と復活は、不可分の統一をなす出来事の二つの側面である。これはヨハネ福音書において顕著な見解である。ヨハネ福音書では「あげる」「あげられる」という言葉が、イエスの死と十字架の両方に用いられている。またヨハネが語るイエスの「時」は、イエスの死の時であると同時に、栄光を受ける時である。ヨハネにとってイエスの十字架による死と復活は、死を通して命に至る唯一不可分の過越の神秘である。

5. 「復活の救済論的意義に関する6つの点」：

- ① 神の正義の証明；
イエスが無罪であるとの神の判決であり、また神が世を救うとの約束を守った。
- ② 子であることの承認；
父が十字架の苦難を負ったイエスこそ、父の愛する子であると宣言した。
- ③ 死者の初穂としての復活；
イエス・キリストは、全ての死者の初穂として復活した（I コリ 15:20）。それは命と愛の勝利であり、私たちの復活の保証である。それゆえ私たちは、希望を持って生きることが出来る。
- ④ 復活の時点から、キリストの支配が始まる；
その時から、神の支配はキリストの支配となる。終末の完成の時、万物を御父に返すまで、キリストが支配者となるのである（I コリ 15:24-25）。
- ⑤ 希望の地平の広がり；
人間の全ての努力には意味がある。しかも最終的にそれが実る保証が与えられているわけである。確かに、全ては神の恵みである。だがそれでも神は、私たちの協力を求められている。
- ⑥ 三位一体の出来事；
復活は三位一体の神秘の出来事でもある。子は常に父へ向かう。子は十字架と復活を通して、父へと一致し、そこから聖霊が派遣される。こうした上昇と統合の神秘として、キリストの復活があり、その三位の交わりの神秘に私たちも参与出来る道が開かれた。

主任司祭 松村 信也

作業室のデスクトップパソコンをお使いのみなさまへ

作業室（信徒会館の2階）のデスクトップパソコンのメンテナンスを行います。
現在、パソコン内にデータを保存されている方は、必要があれば各自でデータを
保管してください。初期化を行いますので、データはすべて消去されます。

作業予定日：11月20日頃

～．～

<行事報告>

雨宮神父の「旧約聖書講座」を聴いて

9月24日（土）25日（日）に行われた、雨宮慧師の講義『モーセという人』は、出エジプト記1～3章、11～14章の資料分析についてであった。旧約聖書のモーセ五書が、ヤハウィスト、エロヒスト、祭司文書、申命記資料の4資料を使って書かれたという文書資料説は耳学問としては知っていたが、なぜそう言えるのかは理解していなかった。雨宮師は出エジプト記の一部を節毎に詳細に分析し、何を理由に個々の資料が推定されるのかを明快に説明された。面白かったのは、元々あった過越祭という遊牧民の祭り、種なしパンという農耕民族の祭りが、エジプトからの奇跡的脱出に結びつけられた、という解釈である。われわれのミサもその流れの中にあるのだから、いろいろ考えさせられる。（小柳）

45年間神戸を離れていたけれど、親の介護もあって戻ってきた。友人のS君を通じて今回の講座を知った。雨宮神父には30年ほど前、多摩地区の教会の合同合宿でご指導いただいた。聖書を構造的に分析し、謎解きのように解明していく読み方に新鮮な感銘を受けた。

今回の講座でも、ヘブライ語の原義に立ち戻って解説していただき、聖書に書かれていることへの理解が深まったと感じている。私自身は神の名が「わたしはある。わたしはあるという者だ」という箇所がもっとも印象に残った。知的に厳密であることが、深い信仰につながる、という事例に立ち会えたと思う。（岩井）



三日月会総会のご報告

今年も9月19日の敬老の日に総会がありました。午後一時から松村神父によるごミサがあり、そのあと「つながり」と題して講話を頂き、つづいてイグナチオホールで77名の参加者により総会が開かれ、会員動向の様子、年間行事報告、会計報告などがありました。

この一年間に46名の方々が新しく入会され、一方で20名の帰天と13名の転出があり、現在491名の会員の方々が登録されています。年間8回の例会には平均37名の出席者があり、ごミサのあとお茶とお菓子でビデオ観賞や典礼聖歌の唱和等、楽し



いひと時を過しました。

しかし、会員の高齢化や健康上の理由で総会の出席者は昨年より 10 名以上少なく、欠席のお返事 160 名の中には、「出席したいけれど残念です。」という方が多くいらっしゃいました。

地区会のお世話でお配りしている「お誕生カード」が唯一の「つながり」になっているとおっしゃる方もたくさんいらっしゃいます。



このような現状をよく踏まえて、次の一年間の活動テーマを「つながり」として会の運営を進めていきたいと思ひます。すっかりお馴染みの「三日月会喫茶」は、若い方々のお手伝いもお借りして大変賑わっております。みなさん全員がいつか入会される三日月会ですからこれからも大切に守って行きたいと思ひます。

(鈴木)

<行事報告>

六甲混声合唱団を迎えて



10月9日、秋晴れの午後、御影グランド老人ホームに、六甲教会混声合唱団 20 数名が二度目の訪問をして下さった。

指揮のもとに赤表紙の楽譜がいっせいに開かれ、美しいハーモニーで最初に「アヴェ・マリア」、続いて月につわる歌が次々と ホームの私達はしばし童心にかえって拍手拍手でした。圧巻だったのは「証城寺の狸囃子」。歌う人、聞く人が一体となり手拍子が揃って本当に楽しかった。

ときに静まりがちのホームに、こんな楽しい機会を作って下さって、本当に有難うございました。

「ほゝえみに ほゝえみかえす 秋日和」

感謝と祈りのうちに

(マリア小出)

六甲教会の合唱団のご来訪の日がきました。心待ちにしていたので、早めにホールに出かけ待っていると、教会でお見かけしているお顔が次々に入っていらっしゃいました。指揮の方によると、楽しく一緒に歌いながらすすめていきたいとのことでした。歌が得意でない私にとっては、むつかしい歌は困ると内心想っていたのですが、よく知っている歌からはじめて一緒に歌いながら合唱は進んでいきました。すばらしい歌声にひきつけられて心が自然にはずんでいきました。皆さんの歌声に導かれ、私も歌っているではありませんか。歌っているうちに楽しくなってきた、集まっている老人ホームの方々も歌いはじめました。合唱団のお歌や賛美歌に心うたれながら、あっという間に時がたってゆき、大変心満たされた時を過ごさせていただきました。教会でお見かけするだけでお名前も存じ上げないのに心が結ばれたよい時間をいただいていたことに有難うございました。

(マグダラのマリア 濱本)

「音楽には計り知れない力がある」。そう確信した出来事に遭遇したのが、今回のコンサートでした。コーラスの一曲目のイントロに続き、コーラスのワンフレーズが終わらないうちに、今年卒寿を迎えられたご入居の女性の方がしっかりとメロディで歌い始められたことにホームのスタッフはみんな驚かされました。ここ最近では、日常の中で歌を口ずさまれることはなく、お話しさえも言葉数が少なくなりつつある中で、歌いたいという明確な意識を持たれて、大きな声で歌い始められた時には驚きましたが、歌われているお顔の表情がしっかりとしておられ、久しぶりにお見受けした生き生きとしたその表情に安堵すると共に喜びさえ感じました。私たち介護に関わる者は、ご入居されている方々の日々の快適で安全な暮らしを支えるお手伝いをさせていただいていますが、ご入居の方おひとりおひとりのお気持ちに寄り添うことも必要なことだと感じております。しかし、人生の先輩方と私たちとは生きてきた年数も違い、またその時代も大きく違っています。一足飛びには飛び越えられない時間の空間があります。しかし音楽には魔法の箒のようにその空間を一瞬で飛び越え

られる力があります。何者にも替えがたい貴重な力です。

今回、ご縁があってグランダ御影山手にお越しくくださったことを心より御礼申し上げます。そして、またもう一度素晴らしいハーモニーをお聴かせ下さることを切にお願い申し上げます。最後になりましたが、皆様のご健康と益々のご発展をお祈りしております。本当にありがとうございました。

(グランダ御影山手 受付スタッフ 家治川)



<行事報告>

教会大掃除

10月8日(土)9時30分から教会の大掃除をしました。今年は地区別に掃除の分担を決め、秋晴れ下、男性群は主に外回りの清掃、女性群は聖堂や信徒会館の窓や床清掃を行いました。

例年より多くの方が集まり、与えられた場所をてきぱきと清掃していくと、瞬く間に片付きました。掃除の最後に、全員が信徒会館のホールに集まり、地区別参加人数のカウントを始めると、その度に歓声があがり、地区の結束の強さを感じました。

今回の大掃除は、改めて「地区の関わり大切さ」を感じる有意義なものだったと思います。(T.H)



全員で掃除を始める前のお祈り。



教会内の通路や教会の外の落ち葉拾い。



駐車場の溝の泥もきれいに取る。

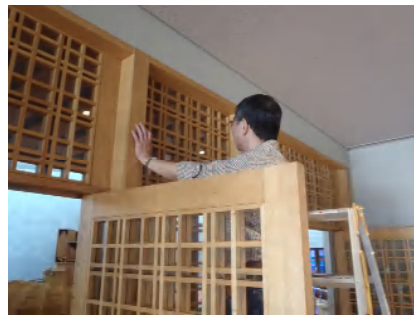


信徒会館の階段、床、聖堂のガラス戸もきれいに磨く。





現場監督？もいます。



孤軍奮闘



労働の後のお茶はおいしい！

《各部だより》 各専門部会の活動をお知らせいたします

📖 典礼部

11月3日(木・祝) 侍者会
11月19日(土) 10時 典礼部会

📖 宣教部

11月26日(土) 10時 宣教部会

📖 施設管理部

11月23日(水・祝) 13時 クリスマスツリー飾りつけ
多くの方のお手伝いをお願いします。

📖 社会活動部

11月2日(水) 10時 手芸の集い
11月4日(金) 10時 ミサ後 連絡会
11月12日(土) 炊き出し

秋のチャリティーバザー 「愛を届けよう」



- ★ 日 時：11月6日（日）9時ミサ後 10時～14時
- ★ 場 所：駐車場
- ★ 内 容：蚤の市、手芸品販売、食品販売などの他、ゲームやイベントもあり。
多数のご来場をお待ちしております！！

七五三の祝福

11月13日（日）10時のミサ中、七五三の祝福をします。
申し込みは聖堂入口にあります。締め切りは11月5日（土）です。



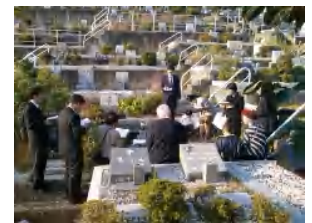
”墓地っ子 たより”

秋の墓参で共同墓地に納骨された方々及び生前刻銘希望の方々のお名前が墓碑に刻まれました。ご関係の方はご確認ください。

個人墓地では司祭の式次第で納骨式（写真）が行われました。このような納骨をご希望の方は委員会までお知らせください。

ところで秋は雑草の勢いも無くなり草取りには絶好の季節です。個人墓地の皆様にご草取り、掃除をお願いします。草ぼうぼうでお隣に迷惑をかけているお墓も多々見られます。

（墓地委員会 SF）



恵みの風に帆をかって——ペトロ岐部と 187 殉教者物語 まるちれす編纂委員会 ドンボスコ社
ペトロ岐部と 187 殉教者 日本カトリック司教協議会列聖列福特別委員会

日本のカトリック教会は、殉教者の血から生まれ、殉教者の血のうえに立っているとされます。そこで質問をいくつかします。(聖人検定 初級??)

質問 1 : 日本人の聖人は何人いますか。そのうちで司祭は何人ですか。その名前を知っていますか?

質問 2 : 日本で、列聖または列福されたのは誰ですか。

質問 3 : 次の人の名前を答えなさい。 A) 徳川家光と問答した神父 B) 日本人で始めてエルサレムに行った人 C) 天正の遣欧使節のうち殉教して福者に挙げられた人 D) 変装して宣教師のいる牢屋や、江戸城に忍び込んで、妖術(魔法)使いのバテレンとして手配された神父 E) マカオで叙階され京都最後の宣教師で津軽や江戸・四国を回り、大坂で殉教した神父

正解 1 : 日本人の聖人は 29 人 (26 聖人中 20 人・16 聖人中 9 人) です。そのうち司祭はトマス西、ヤコボ朝長、ビセンテ塩塚の 3 人でいずれもドミニコ会士です。

正解 2 : 2008 年 11 月 24 日に長崎で列福された 188 人の福者です。26 聖人 (列福は 1627 年) はローマ 1862 年に、16 聖人 (列福は 1981 年マニラ) は 1987 年にローマで列聖されました。205 福者 (うち日本人は 152 人) は 1867 年にローマで列福されています。

正解 3 : この推薦図書 (教会図書室には 2 冊ずつあります) など見て、探してみてください。

日本のカトリック者は、自国の誉れでもある殉教者にあまりにも関心が少ないと思いませんか。確かに 26 聖人についてはよく聞いて知っておられます。彼らをはじめ、記録に名前の残る殉教者だけでも数千名に上ります。しかし、その一人ひとりの殉教者たちの受けた迫害や、殉教の思い、苦難と恐怖、あるいは慰めについてはあまり知られていません。それは私たちの想像をはるかに越えたものでしょう。単に数や名前ではなく、その信仰のあり方がどのように生き方に表れていったのかをたどってみたいと思います。聖人たちをより近くで意識していくには、その生きた姿を知ることです。どのように生きてどんな思いの中で殉教して言ったのかを、なんで殺されなければならなかったのかに思いをはせることだと思えます。名前だけではイメージも湧いてきません。

「恵みの風に・・・」は子供たちのために書かれた本です。家族や友人と読みあって、3 年前に列福された 188 人のこころや生き方を多くの人に知って、深い共感をもって欲しいと願います。殉教者というと、英雄的な信仰と強靱な精神力による勝利者と捉えられてしまいがちですが、188 人のうち司祭はジュリアン中浦、ディオゴ結城、トマス金罫、ペトロ岐部の 4 人で、大部分はふつうの信徒です。禁教令や迫害がなければ多分、ごく普通の庶民として平和な生涯を送り、歴史の中に埋没していたに違いありません。私たちの日常とは、大きくかけ離れたキリシタン受難の時代のことではありますが、ただ、神との間にきわめて密接な関係を築くことができた人びとであることを考えれば、現在の私たちの生き方とも時代を超えて関ってくることと思えます。(飯塚)



みんなの広場

「諸聖人の祭日」に想うこと

ヨハネ三好

嘗て六甲中学校の創立記念日は11月1日とされていた。「創立記念日」なら財団法人六甲中学校設立認可の12月5日の筈だが、11月1日は「諸聖人の祭日」、昔は「諸聖人の大祝日（1級大祝日）」と称して「守るべき大祝日」であった。「諸聖人の大祝日」が「創立記念日」に化けてこの日は休校になり掟が守られた。昨今はできなければならないことが当然になっているようだが、これでよいのだろうか。

2日は「感恩音感謝の日」この日だけは全校生徒を集めてミサが献げられ、恩人に感謝をする日であった。「聖人」とは何か。いわゆる「聖人君子」の聖人ではない、確かに神の至福に与っている、天の国に受け入れられた人のこと。人間一人一人の死後を神は大部分世の終わりまで明らかにされないが、既に天国に入ったと認められる人々がいるから。そのほかにも知らない聖人が大勢いても不思議ではない。だから「諸聖人」を祝い取り次ぎを願う。使徒信条の「諸聖人の通功」は「聖徒の交わり」に変わった。「聖徒の交わり」については「カテキズム」、「カトリック教会のカテキズム要約」に明らかにされているが、その違いについて。李聖一師もその著「希望のアポロギア」で触れておられる。聖職者中心の教会から神の民の教会へ。李師は其中で、聖人と認められる人たちの大部分は聖職者、修道者だといわれる。Laudateにある聖人伝をみても確かにそうになっている。随分前のことだが「信徒の聖成は世俗にあり」と言われたことを覚えている。毎日の時々刻々がそのまま天国に連なっていることを心に刻み込んでおかないと、「聖人」になれなければすべては「無」よりも悲惨になる。

2日は「死者の日」、嘗ては「奉教諸死者の記念日」とされ、煉獄で罪の浄めと償いをしている靈魂が神の至福に与えるように祈り、代わって彼らの罪の償いをする日とされていた。この日司祭は煉獄の靈魂のために各自3回ミサを捧げることが許されていた。又、前日の正午から煉獄の靈魂のために全免償が与えられ免償を受けることが勧められていて、何人もの信者が時間をやり繰りし何回も聖堂に出入りして免償を稼いでいたことを覚えている。今は社会の変転で全免償の条件を満たすのが難しいことが多いが、忘れてはならないことではないか。最近煉獄のことがあまり言われなくなったが、煉獄については「カテキズム」にも、「カテキズムの要約」にも説かれているとおりに信ずべきことのはずである。信仰の実践は時と共に又場所によって変わる。しかし長く守られてきた信仰の習慣は時と場所によって変わるものがないものが根底にあることも心に留めておきたい。

広島平和記念大聖堂献堂式のミサは、ゴーセンス師指揮のフォーレのレクイエムであったような記憶がある。当時の制式に反してこのミサ曲では続唱「Dies Irae」が除かれ、聖変化の後に制式にはない「Pie Jesu」が加えられている。この「Dies Irae」は現在の死者のミサでは除かれている。嘗て死者のミサ、死者の記念には審判の厳しさが強調されたが、現在は審判を蔑ろにはできないがそれよりも神の慈愛が強調されるようになっている。フォーレは現代を先取りしていたのだろうか。自身被爆者で悲惨を体験し大聖堂建立に奔走されたラッサール神父にとって、大聖堂にはレクイエムが、「Dies Irae」より「Pie Jesu」がふさわしかったのだろうか。この教会の葬儀で出棺の時に意味不明の賛美歌を歌うが、理解に苦しむ。出棺には長く歌い継がれた美しい「In paradisum」があるのになぜこれを捨てるのか。

聖暦年の最後は「王であるキリスト」の祭日、史上最も悲惨な王、悲惨な王はその悲惨によって今もすべてを支配しておられる。「諸聖人」「死者」「王であるキリスト」は一つのもので生きる人の一人一人のすべてであることを覚えておこう。聖暦年の終わりに相応しい。今月は新しい年の待降節に入る。

余談を一つ。「援助修道会」は嘗て「煉獄の靈魂援助姉妹会」と称していたことがあった。ブラウン神父はこれを省略して「煉獄」と呼んでいて、援助修道会が六甲に来ることが決まったときは喜色満面「『煉獄』が来るよ」言われたのを覚えている。「煉獄」！？

映画「エンディング ノート」

この映画の主人公は、ほぼ私と同じ歳の男の話である。何よりも「段取り」を重視してきた元熱血営業マンの彼が、会社を引退した2年目の検診で胃がんが発見される。それも第4ステージまで進んだ末期癌で医師からも「余命いくばくもない。」と聞かされる。そこから彼の死に至るまでの段取りが始まった。

まず葬儀は教会でお世話になれないものかと、四谷のイグナチオ教会を訪れ、神父に相談する。(何とこの神父は桜井神父) 主人公は教会を訪れた動機を「信心深く生きるためではなく、気持ちが安らかになれる場所はないだろうかこの場を選んだ。葬儀も簡単だし、費用も安いから。」と本音を述べている……。

一人の男が自分の死を見つめ、淡々と段取りする姿を、次女が冷静にカメラに収めていくこの映画には、何か見る者の心を揺さぶるものがある。「人間は死を目前にして、こんなに冷静になれるものだろうか、何が彼をそうさせているのだろうか」私は映画を観ながら思った。そして、父親を取り巻く家族の絆、愛に心を打たれた。死を目前にして、主人公が「これからいいところに行く」と口走ると、家族が「それはどんな所なの？」と次から次に質問する。「それはちょっと教えられない。」と。死への不安の中にも、ユーモラスな一面を見せる主人公。私自身、死をこんなハッピーな気持ちで迎えられるだろうか。

悲しくも心温まるドキュメンタリー映画だ。ご覧になりたい方は、現在元町映画館(元町商店街)で上映中。但し、上映期間と上映時間(問い合わせ Tel366-2636)に注意してください。(蛭田)

ありがとう、藤原泰さん!

片柳 弘史

六甲教会事務室で長年にわたって奉仕して下さった藤原泰さんが、75歳を期に離任されました。藤原さんは会計を始め事務所のあらゆる仕事をこなし、目立たないところで六甲教会の土台を支える「隅の親石」のような存在でした。

わたし自身は、3年半前に助任として六甲教会に赴任してから、藤原さんにどれだけお世話になったかわかりません。コピー機やパソコンが故障したり、事務のこと、古くからの信者さんたちのことで分からないことがあったりした時、「何でも分からないことは藤原さんに聞こう」ということでやってきたので、事務室から藤原さんがいなくなったことは大きな痛手です。これからもお孫さんたちのお世話のかたわら、ベテラン信徒として六甲教会を支え続けて頂きたいと思います。藤原泰さん、長い間本当にありがとうございました。



教会報12月号の発行は、11月27日(日)です。

編集会議は11月20日(日)です。

記事原稿は、11月13日(日)正午までに信徒会館
受付へご提出願います。(広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会	
〒657-0061	神戸市灘区赤松町3-1-21
電 話	078-851-2846
F A X	078-851-9023
発行責任者	松村信也 神父
編 集	広 報 部